

東京大学の学習支援：学術情報リテラシー担当の活動から

成澤 めぐみ (東京大学情報システム部情報基盤課学術情報チーム)

1. はじめに

東京大学では、学内所属者を対象とした様々な学習支援を行っており、論文やレポート作成の執筆支援を主目的とした文献の探し方・データベースの使い方講習会がその中心となる(なお本稿では便宜上「学習支援」とするが、東京大学の支援対象は大学院生や教職員の比重が大きく、活動内容は研究支援・教育支援をも含む)。それらの学習支援は、各図書館・室によるもののほかに、附属図書館とは別組織である本部事務組織の学術情報チーム内「学術情報リテラシー担当」が、専門部署として部署単独、また図書館・室および部局や教員との連携活動としても行っている。

本稿では、学術情報リテラシー担当主催の学習支援事例を紹介するとともに、今後の支援の方向性等についても触れる。

2. 東京大学の概要

東京大学は国立大学法人としては最大規模の大学の1つで、10学部・15研究科(大学院)・11附置研究所・13全学センター、その他総長・総長室直轄の各機構等で組織されている。教職員は特定有期雇用者を含めて10,000名、学生は学部生14,000名・大学院生14,000名で、各キャンパス在籍者の合計は38,000名となる(いずれも平成25年度現在概数)。学部生と院生の人数がほぼ同じというのは日本のこの規模の総合大学としては非常に珍しい。東京大学と比較されることの多い京都大学は、学部生の数は13,500名と殆ど変わらないが、院生は9,300名と、5,000名近い差がある。

この学生全体に占める院生の割合の高さ、ひいては他大学から進学してくる院生の多さは東京大学の特徴ともなっており、行われる学習支援も当然これを考慮したものとなる。院生が多い点については、学習支援のなかで比較的専門性の高い内

容をも扱うことにつながり、院からの入学者が多い点については、学術情報やその利用に関する案内が、学部の初年次教育時にとどまらず必要となることにつながる。

次に、東京大学の附属図書館と学術情報リテラシー担当の位置づけについて、図1を示す。



図1 東京大学附属図書館および学術情報リテラシー担当組織略図

図のとおり、学内に物理的な「附属図書館」があるわけではなく、本郷キャンパスの総合図書館・柏キャンパスの柏図書館・駒場キャンパスの駒場図書館のキャンパス3図書館のほかに、医学図書館・社会科学研究所図書室といった、組織としては32、物理的には40を超える部局図書館・室が存在している。これらを総称した呼称が「附属図書館」で、いわばバーチャルな組織としての名称である。なお、現在東京大学では新図書館計画が進みつつあり、今後の「附属図書館」も変化していくことが予想される。

学術情報リテラシー担当は先述のとおり、附属図書館とは別組織である。本部事務組織情報システム部情報基盤課に、いわゆる「図書系職員」¹⁾が配属される学術情報チームがあり、うち常勤2名・非常勤1名の計3名が「学術情報リテラシー担当」として学習支援を専任業務としている。別組織とはいえ、もちろん業務は附属図書館と連携して行う部分が大きく、居室も総合図書館の3階

にある。見聞の範囲では、国立大学法人においては図書館の参考調査(レファレンス)担当部門が学習支援担当を兼ねることが多く、学習支援を専任的に行う部署の存在はレアケースと思われる。

3. 東京大学の学習支援

学習支援活動の中心となる各種講習会について、平成24年度の開催実績を表1に示す。

表1 平成24年度 学術情報リテラシー担当主催講習会等開催実績

種 類	回 数	受講者数	備 考
テーマ別ガイダンス [うち夜間ガイダンス]	54 [夜 12]	302 [夜 39]	1 つのテーマについて検索実習を交え解説、学内オープン [夜間ガイダンスは完全予約制]
留学生向けガイダンス	3	28	留学生向けにネイティブの講師が担当
データベースユーザトレーニング	12	109	専門性の高いデータベースについて提供元から講師を招聘
秘書さんのための はじめての論文の探し方	3	45	研究補助従事者を主対象として実施
オーダーメイド講習会	36	523	教員・学生等からの依頼内容に合わせて実施
図書館・室等との共催講習会	68	616	図書館利用案内と併せて実施、特定主題分野の講習会等
合 計	176	1,623	

平均では毎月14回強の開催、講習会1回あたりの受講者数は9名となる。もちろん実際には時期により開催数は異なり、繁忙期である4・5・10月は月に20回以上開催する。

活動のメインとなるテーマ別ガイダンス、オーダーメイド講習会、共催講習会の詳細は後述する。

留学生向けガイダンスは文献検索の基礎的内容を中国語・韓国語で実施しているもので、教材と講師解説用の資料を学術情報リテラシー担当が作成している。講師はネイティブの大学院生(講師自身も殆どの場合留学生である)で、教材等の翻訳も併せて依頼する場合が多い。総合図書館との共催講習会となるため表にはカウントされていないが、他に英語によるものも同様に実施している。

データベースユーザトレーニングは、『SciFinder』(物質の構造作図から検索する機能もある化学系専門データベース)など、学内講師では講習を行うのが難しい専門性の高いツールについて、外部講師を招聘して行っている。

【秘書さんのための…】と題した研究補助従事者を主対象とした講習会は、やはり文献検索の基礎コースである。通常の講習会でも秘書・研究補助従事者の受講は可能だが、受講者側が「敷居が高い」と感じるようで参加が少ない。そのためあえてこの名称で「秘書さん」以外も受講は可、という形で実施している。

もちろん、表1掲載のほかに、各図書館・室による講習会・説明会等の学習支援は別途行われている。

3.1. テーマ別ガイダンス

1つのテーマについて検索実習を交えながら解説するもので、学内者は誰でも受講可能な学内オープンの講習会である。主に総合図書館1階にある「講習会コーナー」を会場として予約不要の形で開催する。昨年度から同じ内容で、完全予約制の「夜間ガイダンス」も行っている。



図2 テーマ別ガイダンス

医学系・経済学系等、ある程度分野に特化した講習会も行うが、幅広く需要のある文献検索や文献管理ツール(詳細は後述)の入門編が中心となる。一例が【はじめての論文の探し方】といったコースである。このコースでは「図書・雑誌検索(『東京大学OPAC』)→日本語論文検索(『CiNii Articles』)→英語論文検索(『Web of Science』)→学外アクセスサービス」と、学術情報検索についてひとつおりの実習を行う。ただし、説明する内容に大きな違いがない場合でも、あえて【人文社会科学系のための…】・【自然科学系のための…】と冠して、別コースとして開催する場合もある。これにより、「自分に」役にたつものでは、という関心をもたせる効果が生じる。この場合は、同じ検索機能の実習でも、例題をそれぞれの受講対象に合わせたものとして教材を作成する。たとえば「特定の文献を引用している論文」を検索する機能の説明時、人文社会科学系コースではP.F. Druckerの『Management: tasks, responsibilities, practices』(を引用している論文の検索)を例題とし、自然科学系コースではWatson & CrickのDNA二重螺旋構造についてのNature掲載論文²⁾(を引用している論文の検索)を例題とする、といった形である。

また、学習支援で扱うスキルが受講者にとって必要になる場面を考えることによって生まれたコースの例が【論文投稿シミュレーション】である。文献データの整理から論文投稿規定に沿った文献

リスト作成までの流れを、文献管理ツールと雑誌評価指標検索ツールを組み合わせることでシミュレーションする、という視点で構成したもので、学術論文の執筆・投稿を志す大学院生の参加者が多かった。

いずれのコースも、詳細については後述のウェブサイト内の講習会教材コーナーに掲載した配付資料を参照してほしい。

3.2. オーダーメイド講習会

オーダーメイド講習会は、教員の依頼により授業の1コマを使って文献検索の基礎を解説する、また研究室へ出向いてメンバーへ講習を行うといった、名称どおり注文に応じて内容や方法をカスタマイズするものである。開催側としては学生グループからの依頼も喜んで受け付けたいと思っているが、多いのはやはり教員からの依頼である。

初めてのオーダーの場合は、依頼者と講習内容等のすり合わせを行う。相手が多忙、かつキャンパスが離れている場合もあり、メールでのやり取りが中心となる。依頼者の要望自体「〇〇系の基本的な文献検索を」といった曖昧な場合も多いため、そうした時は受講対象者の層(学部生か院生か教職員か)を確認して、こちらから対象とするデータベース・ツールや内容を提案する。分野の近い講習会の教材を例示して、どういったレベルまでを希望するか(文献検索対象は日本語か英語か、文献管理も含めるか)、会場や時間の縛り、参加者数、実習か講義かといった講習会の形式も確認をとる。データベース提供元等の外部講師の力を借りる場合は、その仲介も含めての提案となる。

教材作成にはいった後も、その分野・研究室に関わる例題とするための工夫が必要である。具体的には「研究室、関連部局サイトから例題用の検索キーワードを拾う」・「部局図書館サイトからシラバス掲載図書を調べる」等の手順である。もちろん、すり合わせのやり取りのなかで教員からキーワードの示唆を受ける場合もある。これらにより、必ずしも当該分野の専門知識がなくとも、医学系や数学系等に特化した文献データベースの検

索実習例題作成が可能となる。研究室へ出向いて講習を行った際の受講者からは、「分野に関係したキーワードで、一連の流れで理解できて良かった」という声があった。また、テーマ別ガイダンスでは扱うことの少ない専門的データベースの講習を可能な範囲で行うことは、学術情報リテラシー担当にとってもスキルアップ面で有効である。

こうして策定するオーダーメイド講習会は、平成23年度末から次年度の実施予定をその年度の発注者へ照会することをはじめた。これにより、オーダーメイド講習会を年間授業計画等のなかに含めて定例化し、根付かせていくことを目的としている。また最近では、オーダーメイド講習会を利用した教員の「クチコミ」により新規の依頼が来たケースもある。

3.3. 共催講習会

共催講習会は、部局図書館・室からの依頼により行う場合が多く、オーダーメイド講習会同様に内容のすり合わせをするのはもちろん、運営面における役割分担も相談して決定する。いわゆる図書館オリエンテーションや利用ガイダンスと講習会を組み合わせて行うことも多い。講習会のみ開催する場合も、学術情報リテラシー担当が講師を担当し、部局は講師補助や、広報・予約者の管理といった運営面を担当する、等の分担を行う。更に開催回数が多い時には、後半の回において部局図書館職員が講師を担当することもある。これらが学術情報リテラシー担当に「おまかせ」ではない当事者意識の向上や、部局図書館員のスキルアップにもつながっていく。

更に共催講習会は、通常本郷キャンパスで行われることの多いテーマ別ガイダンスに対して、地理的ハンデのある他キャンパスへ出向く、という意味もある。そのためテーマ別ガイダンスで受講者の多い他キャンパス部局に対し、学術情報リテラシー担当から「共催講習会をやってみませんか」と「営業」をかけることもある。

共催講習会もオーダーメイドと同様に、23年度末から次年度の実施予定照会を行うようにした。

部局のスケジュールへ組み込み、途切れないようにするものである。また様々な形の共催講習会開催を重ねることで、たとえば事前予約の有無による確認事項や講義／実習形式時の違いなど、運営手順も徐々に整備され、学術情報リテラシー担当へ蓄積されていく。更にそれが、共催先の各部局図書館・室において学内のスキル共有がはかれることにもつながる。

3.4. 新しい試み

昨年度開催実績を基として紹介してきたが、ここで今年度の新企画をあげておく。平成25年7月5日開催の【英語論文セミナー ～国際誌に投稿するために知っておきたいこと】である。

これはオープンアクセス出版社BioMedCentral (以下BMC)の協力を得たもので、学術情報リテラシー担当主催では初めて、英語の学術論文執筆をテーマとした大規模セミナー開催となった(BMCは医学系中心出版社だが、セミナーでは分野は特に問わないこととした)。当日のプログラムは以下のとおりで、英語講演は通訳なしの形である。各プログラムの詳細は同セミナーウェブサイト³⁾で確認できる。

論文準備のための文献管理：RefWorks [学術情報リテラシー担当]

Trends in Scholarly Publishing and Open Access [BMC]

国際誌に論文を投稿するのは四苦八苦 [BMC学術誌編集委員、東大薬学系教員]

Author Academy: Writing to communicate [BMC提携英文校正会社]

本セミナーは大学院生、助教、研究員などの若手研究者を中心に102名が参加した。アンケート回収率も9割を超え、「エディターの求めていることが聞けてよかった」等の声があがった。学術論文、特に英語論文の執筆に関する支援は、院生の比率の高い東京大学では需要が多いことをあらためて確認する機会となった。こうしたセミナー

は、今後もより充実した内容とするため、出版社や教員等との連携を基本とした形で開催していきたいと考えている。

3.5. サイト運営・支援資料作成

講習会以外の業務では、各種の電子的学術情報にアクセス、利用するためのポータルサイト『GACoS』(Gateway to Academic Contents System)⁴⁾を作成・運営しており、このGACoSに、以下に示す学習支援資料も掲載している。

『ネットでアカデミック』: 学習支援の中心になる基本資料。印刷版は40ページの小冊子で、初心者向け講習会では常に配付資料としている。ネット検索に先立つ情報検索の基礎知識やコンピュータリテラシー情報も掲載。日・英・中・韓の4か国語。

『文献探しのヒント』: 東京大学で利用できるデータベース等のサービスについて、概要や機能を紹介したリーフレット4種(日・英2か国語)を作成。これも印刷版を配付資料としている。

『文献探しのクイックガイド』: リーフレットを拡充したような内容の、1テーマ1、2分程度のウェブ版アニメーション教材。

『東大GACoSワンポイント講座』: Ustream(録画)による各3分間前後の実写動画教材。

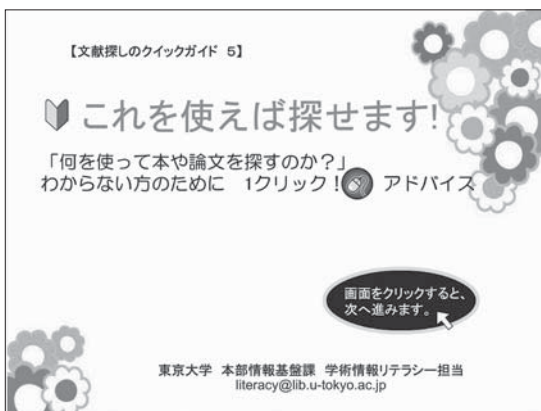


図3 文献探しのクイックガイド

また、実際の講習会用に作成した教材は以前からGACoS内講習会スケジュールページと一緒に

掲載しているが、別途、分野や対象の主要ツールに沿ってわかりやすく掲載したコーナーも新設した。講習会への参加意欲はあっても時間が合わず参加できない人、講習会の概要を事前に知りたい人に向けたものである。これらは、殆どが学外からも閲覧できる。東京大学学内者向けに作成しているものではあるが、学外者にも活用してもらえれば、作成側としてはありがたい。

なお、ここで紹介した学習支援資料は、『ネットでアカデミック』を中心に、来年度は大幅なリニューアルを予定している。リニューアル後は、印刷版とウェブを連携させ、印刷版はよりコンパクトな形態として本文はウェブ掲載、といった形で、新規サービス導入等の情報更新についてより迅速に対応したいと考えている。

3.6. 広報・情報発信

講習会を開催しても参加者がいなければ、また資料を作成しても使われなければ意味はないため、それらの広報や情報発信も学習支援業務には大きな意味をもつ。

広報のメインとなる講習会の開催案内を行う場合も、その講習会の開催条件により、有効な広報手段は異なってくる。共催講習会、特に離れたキャンパスにある部局を会場として開催する場合は、部局内でその所属者に広く行き渡るメーリングリスト等による案内が効果的なことが多い。学内オープンの場合はキャンパス内各掲示板のポスターや、自由に持ち帰ることのできるチラシを見ての参加者が多くなるが、経済学等特定分野の講習会の時には、別途関連部局へ個別の案内も行う。たとえば農学系に「農業・資源経済学専攻」があるなど、意外な部局で当該分野講習会を必要とする場合もあるので、「部局内分野」についてもなるべく詳しく調べておくとよい。

手段としては、GACoSや学内ポータルサイトへのニュース掲載のほか、東京大学所属者対象のメールマガジン『Litetopi』(リテトピ)を発行している(バックナンバーはGACoSに学外閲覧も可能な形で掲載)。月に2回、講習会・データベース

関連情報の発信を行い、現在の購読登録者は約2000名である。またTwitterによる情報発信も3年前から行っている。こちらはフォロワーが1200名を超えたところで、講習会案内のほか、データベースの急な不具合など、事前にニュース掲載のできない情報も含めてタイムリーに通知できるのが利点である。この即時性によって、「前日16時までに3名以上予約が入れば開催」という形の夜間ガイダンスを行うことが可能となった。

これらの様々な媒体による案内、個々の情報発信を総合して、学術情報リテラシー担当が行っている学習支援活動の全体について「こんなサービスが学内にいる」・「こうした疑問に答えてくれる担当者がある」という認識を持ってもらうことが重要である。

もちろん情報発信だけではなく、収集も欠かせない。主催の講習会はすべてのコースで受講者アンケートをとり、業務にフィードバックさせている。アンケートは3年前から、PCによる実習形式の際は講習会終了後GACoSへリンクさせたウェブ版でその場で行うこととし、これにより集計負担の軽減と回答率上昇につながった(講義形式の講習会では紙のアンケート)。

4. これからの学習支援

学習支援業務は、これからどうなっていくのか。支援対象となる大学所属者の変化(たとえばデジタルネイティブ・デジタルチルドレン等と呼ばれる世代の登場)、大学における学習そのものをめぐる変化(たとえばアクティブラーニング等、授業形態の多様化)など、既に周辺の様々な変化は起こりつつある。

ここでは、講習会等で使用するツールについて少し触れておきたい。主要ツールの1つであるOPACは、いわゆる「次世代OPAC」として、以前からの検索対象である冊子体の資料に加えて、その大学で契約している電子ジャーナルや電子ブック、機関リポジトリのコンテンツなど扱うものが多様化している。更に最近では、「ウェブスケールディスカバリサービス」(以下、ディスカバリ)

と呼ばれるツールの導入機関が増えつつある。ディスカバリの詳細な説明は紙幅の都合上ここでは省くが、カレントアウェアネスの動向レビュー⁵⁾等が参考になるだろう。これは次世代OPACの発展形とも言えるものであり、利用者の感覚では「Google的に」幅広く文献を検索できる。おそらく今後の文献検索の主流、つまり学習支援業務の主要ツールとなっていくだろう。しかし当然ディスカバリも万能ではない。現時点では日本の新聞記事データベースはその検索対象となっておらず、また利用者によっては、引用関係でたどる、シソーラスを確認して上位語・下位語を使う、といった個々のデータベースの特性を生かした検索の方がはるかに有効な場合もある。ディスカバリは便利であるだけに、その限界も含めて、個々の利用者に必要な情報へいかに導いていくかの工夫が必要となってくる。実は、先に触れた学術情報リテラシー担当で作成している学習支援資料の大幅な見直しについても、東京大学でのディスカバリの導入が理由の1つである。

また、「文献管理ツール」の登場と普及も、学習支援に現在進行形で影響をもたらしつつある。文献管理ツールは、データベース等から文献情報を取り込み(またはツール内に文献情報を入力し)、整理して、更にそれらの情報を使った文献リストを様々な引用スタイルで作成できる機能をもつツールである。東京大学ではウェブ版のツール『RefWorks』を契約しているが、他に、特に医学系で利用者の多いクライアント版ツール『EndNote』や、SNS機能もあるフリーツール『Mendeley』などがある。文献の収集とリスト作成の双方に関わる文献管理ツールは、論文データベースによる文献検索中心になりがちな講習会の、もう1つの柱となるべきツールと言えよう。実際、昨年度の学術情報リテラシー担当主催講習会において、文献管理ツール単独、または論文データベース等との組み合わせで行ったコースは全体の3割を超えている。文献管理ツールは論文データベースと比べ、図書館職員側のなじみは薄いかと思うが、先述のとおりフリーツールもあるの

で、ぜひ自ら使ってみてほしい。

最後に、「大学職員へのサポート」について触れる。この大学職員は、教員や研究員等の研究者層ではなく、いわゆる事務系を中心とした職員を指す。もともと、学習支援業務で扱われる「学術情報」は、大学の業務全体の屋台骨とも言うべきものである。学術情報面から大学職員の業務、ひいては大学の運営を後方支援する、という視点があってもよいのではないか。現在の東京大学の取り組みでは、秘書向け講習会や附属病院看護師向け講習会にそれに近い面があるが、より拡充する場合には、たとえば産学共同研究や大学の自己評価/外部評価支援業務関係者などが考えられるだろうか。

「読書は充実した人間を作り、会話は気がきく人間を、書くことは正確な人間を作る。」⁶⁾

これはフランシス・ベーコン『随想集』中の「学問について」の一節である。大学における学習支援には、読書-文献を読む、会話-コミュニケーション、そして執筆のすべてがある。

今後もそこに携わる者の一端として、より充実した学習支援とは何かを考えていきたい。

(なりさわ めぐみ)

参考文献

1. 関東甲信越地区図書系専門試験実施委員会. “図書系の業務とは?”. http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tosho_shiken/saiyo_job.html(参照2013-11-28).
2. Watson, J.D.; Crick, F.H.C. Molecular Structure of Nucleic Acids - a Structure for Deoxyribose Nucleic Acid. *Nature*. 1953, vol. 171, no. 4356, p. 737-738.
3. 東京大学本部情報基盤課学術情報チーム [学術情報リテラシー担当]. “英語論文セミナー2013~国際誌に投稿するために知っておきたいこと~”. <http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/koshukai/2013seminar.html>(参照2013-11-28).
4. 東京大学本部情報基盤課学術情報チーム [学術情報リテラシー担当]. “GACoS”. <http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/index.html> (参照2013-11-28).
5. 飯野勝則. 動向レビュー：ウェブスケールディスプレイの衝撃. *カレントアウェアネス*. 2012, no. 312, p.18-22. <http://current.ndl.go.jp/ca1772>(参照2013-11-28).
6. Bacon, Francis. ベーコン随想集. 渡辺義雄訳. 岩波書店, 1983, 327p.

東京大学の学習支援：学術情報リテラシー担当の活動から

成澤 めぐみ (東京大学情報システム部情報基盤課学術情報チーム)

東京大学における学習支援活動(学術情報リテラシー教育、研究支援、教育支援、各種講習会、資料作成等)について、学内の担当部署である情報基盤課学術情報チーム内・学術情報リテラシー担当による実際の取り組みを紹介する。学内オープンで行う「テーマ別ガイダンス」、教員や学内他部局等との連携による「オーダーメイド講習会」「共催講習会」など、年間170回以上開催する様々な講習会の策定や運営等について述べ、併せて学習支援等のためのポータルサイトや支援資料作成、広報活動等にも触れる。

また講習会で扱うツールや利用者の変化なども含めて、今後の学習支援活動の方向性についても展望する。